

第4節

学校方式で 盲導犬訓練士を養成



「よい訓練士として最後に残った者は5%～8%であった」と語るのは近代盲導犬事業の推進者で盲導犬訓練学校「シーイング・アイ」の創立者ドロシー・ハリソン・ユースティス。

彼女は「訓練士の育成は難しいものとは考えていなかったが、実際に経験して、この仕事に適した人は極めて少ない」とも。

盲導犬訓練士の養成は今も続く事業者の大きな課題です。

当協会は「学校方式」で課題克服に臨みました。

日本盲導犬協会の盲導犬訓練は、設立後間もなく塩屋賢一氏が独立分離したこともあり、残った訓練士が年間数頭から10頭前後の盲導犬を育成しながら伝統をつないでいきます。ようやく、神奈川訓練センターが竣工、翌年の1998年（平成10年）に国際盲導犬連盟（IGDF）加盟が承認されるまでになります。当時は、協会で働きながら訓練実務を学び、必要な科目は放送大学で学ぶなどして盲導犬歩行指導員を養成していました。年間育成頭数は15頭前後でした。

しかし、2001年（平成13年）、訓練責任者をはじめ多くの訓練士が離脱したため、育成頭数は3頭となります。残ったのは若い訓練士だけでした。そのため、2002年日本ライトハウスから中村透氏ら3人の盲導犬歩行指導員を招へい、訓練の立て直しを図ります。

当協会は、盲導犬は視覚障害リハビリテーションの一部であるという考えを持っていることから、盲導犬訓練士は白杖歩行指導員資格を取ることに決め、日本ライトハウスで研修を行いました。一方、盲導犬の訓練は、当時オーストラリアから帰国し、関西盲導犬協会に所属していた多和田を短期間派遣してもらい、訓練指導をお願いしました。これにより年間育成頭数は20頭へと回復します。

2002年7月、当時の理事長、高井伸夫氏は50頭育成体制の構築を事務局に指示します。訓練士の養成と訓練犬確保のための自家繁殖、この2つの体制づくりを柱とする、中期5か年構想が2003年6月に提案されました。そこには、訓練士養成機関としての盲導犬訓練士学校設立が明記されています。9月に井上幸彦理事長新体制下で訓練士学校構想は具体化し、2004

年4月開校へと進んでいきます。



日本初の盲導犬訓練士学校が開校

訓練士養成のための学校は、「財団法人日本盲導犬協会付設盲導犬訓練士学校」として、神奈川訓練センター内に2004年（平成16年）4月開校しました。

盲導犬訓練士学校は、日本で初めての学校方式で訓練士を育成しようというものです。従来の働きながら学ぶ徒弟制度的な方式では、研修内容に濃淡ができ、一人前の盲導犬訓練士になるまでに時間がかかります。また、研修生の負担も大きく、途中で挫折する者も少なくない、という現状がありました。

盲導犬訓練士学校は、盲導犬訓練士に必要な知識や技能を体系的に修得することができるカリキュラムを整え、理論に基づいた訓練技能や必要な知識、そして視覚障害者と向き合う訓練士としてふさわしい人格の育成を目指しました。つまり盲導犬訓練士養成と人間教育、双方を掲げていたのです。

黒光学校長自らが「人間教育」を担当

初代の学校長に就任した黒光庸恭（現・副理事長）は、第1期生を迎えるにあたり、式辞で次のように話しています。

「学校にとって1期生は非常に大事です。この学校は普通の学校とは少し違います。1つ目は盲導犬訓練士になるという人生設計をしていることです。大学のように何となく学ぶ場所ではありません。2つ目は視覚

障害者の役に立つという絶対的使命感を持って入ってくることです。3つ目は知識だけを教えるつもりはありません。講義と実習が常に平行し、頭も鍛えるが、腕も鍛える、心も鍛える、そういう学校を目指します。授業料は無料です。でも学校運営には莫大^{ぼくだい}なお金がかかります。善意の寄付、浄財で勉強していることを忘れないでください。私と次の4つのコミットメント、つまり約束をしてください。①誠実な人でありなさい②卑怯^{ひきょう}な人になってはいけない③社会正義を愛しなさい④世の中の役に立つ人間になりなさい。」(式辞より抜粋)

そして黒光学校長自ら、月1回の講義「講話」を担当しました。開校から休校までの11年間、1期生が3年間で約30回、9期生まで合わせると、この講義は約270回にもものぼります。講義は一方的に話をするのではなく、また、正解を求めるものでもありません。学生が自ら「何をどのように考えたか」、毎回レポートを提出するものです。

こうしたレポートの提出は、他の教科でも求められます。学生は毎日のようにレポートを提出します。正解を覚えるのではなく、自分の考えをまとめることに重点を置いた人材教育を行っていたのです。

盲導犬訓練士学校の学生に対して始まった人材教育は、やがて職員教育の柱となっていき、2009年からの「徳のある協会づくり」へと進みます。まさに、その後の当協会の人づくり、体質づくりへと引き継がれていきます。

黒光学校長の講話テーマの一部を紹介します。
日本のガバナンス、予算について／日本の歴史(幕末・明治維新・明治・大正・～昭和20年・戦後)／戊辰戦争とは／会津武士道／乃木希典／企業会計・企業分析／経営私論／ソブリン問題 (EU・日本)／リーマンショックは何故起こったか／中国論／人間成長の3段階／般若心経

そして、3時間の講義の最後は「今日の一言」を紹介、解説しています。

多和田が教務長として 盲導犬訓練士養成の専門教育を担当

日本最高レベルの科学に基づいた訓練技能の伝授を担当したのが、多和田教務長です。訓練士として必要な知識の教示は、第一線で活躍する講師陣にお願いしました。

修業年限2年の盲導犬訓練基礎科を卒業した学生には、協会認定の准盲導犬訓練士資格が付与されます。さらに進学するにふさわしいと認定された者は、1年間の盲導犬訓練専修科へ進み、卒業すると社会福祉法人日本盲人社会福祉施設協議会の定める「盲導犬訓練士養成基準」を満たし、全国盲導犬施設連合会の盲導犬訓練士受験資格と受験推薦を得られる制度となっています。この資格試験に合格すると盲導犬訓練士として認められます。

●訓練実習授業の多いカリキュラム(基礎科)2年間

- 1 1日の授業時間は午前3時間、午後3時間、計6時間
- 2 講義科目は、1コマ3時間授業5回をもって1単位
- 3 実習科目は、1コマ3時間授業15回をもって1単位
- 4 卒業単位は講義39単位、実習・見学37単位の計76単位

(基礎科カリキュラム)

- ・訓練理論系
盲導犬訓練基礎論／盲導犬訓練応用論／盲導犬事業論／盲導犬歩行指導論
- ・健康管理系
犬学／犬栄養学／犬衛生学／犬行動学／犬生物学／特別講義(皮膚学、補助犬、動物の福祉など)
- ・視覚障害リハビリテーション系
視覚障害者リハビリテーション概論／障害者福祉論／リハビリテーション論／面接技法／眼科学／障害



自ら講壇に立つ黒光学校長。盲導犬を育成する「心」を伝えました

者心理学／白杖歩行指導／特別講義（障害児ケア、ロービジョン、^{もろろ}盲聾など）

・一般教養系

英語／関係法規／論文／講話／施設見学／自由研究

・実習系

訓練実習／犬舎管理実習／PR実習

訓練実習の初日は、24時間のアイマスク体験からスタートします。これは生半可な体験ではありません。この体験から何を感じ、何を学ぶか、訓練士としての資質が試されるものです。そして、訓練犬を使つての最初の訓練は「夢中づくり」です。これは犬を夢中にさせる訓練で、いろいろなおもちゃを使い、走ったり、声をかけたり、体にふれたりしますが、すぐに犬は飽きてしまいます。

授業は16時半終了ですが、担当する訓練犬を持つようになると、指導担当職員からさまざまな疑問や課題が投げかけられます。「何を見て、どのように判断したのか?」「何を狙ったのか?」「ダメだったらどうするつもりだったのか?」など、質問の嵐です。それに対し、夕方まで学生同士でのディスカッションや復習などが行われます。訓練士学校では、結果としてできるようになることを求めるのではなく、できなくてもできなかった要因を突き詰め、次に何をどうしようかと考えるプロセスを大切に、自分の考えを自分の言葉で説明できることが求められます。

こうした訓練実習は、学生一人ひとりが盲導犬として適性のある訓練犬の担当となり、盲導犬の育成課程を担当職員の指導のもとで行われます。

実習用に盲導犬になれなかった犬を使うわけでも、盲導犬にすることをあきらめるわけでもありません。ここが、一般的な犬の訓練専門学校との大きな違いです。

これは盲導犬に必要なスキルを身につけさせるハンドリングなど訓練技術だけを学ぶのではなく、その犬が本当に盲導犬に適しているかの判断を、明確な根拠を持って下せる能力を身につけることが重要だからです。本物の盲導犬訓練犬を実際に訓練し、一つひとつ丁寧にフィードバックしていくことからしか、この能力は身につけることができないのです。

●徹底した訓練実習(専修科)1年間

専修科への進学を希望する者のうち、進学するにふさわしいと認定された者が専修科への進学を許可されます。専修科の学生には月10万円の奨学金が給付され、盲導犬訓練士として通用する実力をつけるため、徹底

して盲導犬訓練を学びます。共同訓練などにも参加し、盲導犬育成実務を現場で身につけていきます。

(専修科カリキュラム)

・実習科目

訓練実技実習／犬舎管理実習／出産見学実習

●学年別のテーマと目標

(基礎科1年生年間目標)

- ・自己の適性を見極め、盲導犬育成事業における訓練士の役割を知る。
- ・自己の適性と使命を確認する。
- ・訓練した学生本人以外の方が安心して使える犬を訓練する。

盲導犬訓練士に必要な視覚障害者に接する基礎知識(視覚障害者の誘導法、点字など)を学ぶと同時に、犬舎管理、犬の基礎トレーニングなどの実習を行い、2年生に向けての下準備をしていきます。1年生の前半は、担当教務員から全面的にアドバイスを受けて訓練について理解し、後半は半分程度のアドバイスを受けて自ら計画と戦略を立て、候補犬のトレーニングを実践し学びます。また、視覚障害者についての理解をより深めます。訓練士学校では、この1年生の時期をフルサポート期間と呼んでいます。

(基礎科2年生年間目標)

- ・視覚障害者の使える犬を担当教務員の指導のもと、単独で訓練をできるようにする。

担当教務員および盲導犬訓練士(GDT)のアドバイスを受けながら、講義で得た知識を応用しつつ、自ら戦略と計画を立てて候補犬のトレーニングを行います。同時に共同訓練についての基礎知識、実践的な面談技術などを習得します。後期には必要に応じて担当教務員およびGDTに相談し、自ら計画と戦略を立てて候補犬のトレーニングを行うようになります。訓練士学校では、この2年生の時期をセミソロ期間と呼んでいます。

基礎科課程修了者には准盲導犬訓練士の資格を認定します。

(専修科年間目標)

- ・自らが計画と戦略を立てて候補犬の訓練を行うことができる。

訓練士学校では専修科の1年間はソロ期間と呼んでいます。

専修科で学校実技審査に合格した者は、全国盲導犬施設連合会の主催する訓練士認定試験受験資格を与えられます。この試験に合格すると、晴れてGDTとなります。



入学式の翌日はアイマスクをして1日過ごす体験

2 訓練士学校独自の問題発見・問題解決型の教育

生徒自作のテキスト

訓練士学校の目的は、生徒が授業内容を理解して正しく盲導犬育成ができるようになることです。多和田教務長は、テキストやマニュアルなどはあえて作りませんでした。テキストやマニュアルなどがあると、読んでわかった気になるからです。また、多和田教務長は、毎年マニュアルは進化していくものと考えているからです。

代わりに、学生自身が「わが期の教科書」を作るスタイルで進めました。盲導犬訓練理論は、2年生の3月までに教科書を完成させます。そのため、2年の12月に入ると教科書づくりが本格化します。学生同士で授業メモを持ち寄り、いかにして教科書にまとめるか議論していきます。同じ授業でも個々に受け止め方が異なっていたり、講師への疑問確認作業が発生したり、意見がぶつかり合うこともあります。毎年教科書作成には大変な時間と労力がかかります。2年間の学びの結晶が「わが期の教科書」です。

この教科書は、当然、期生によって違ったものができるがあります。多和田教務長自身も、盲導犬育成現場、学生教育現場で日々考えを進化させており、訓練内容は、少しずつ修正され、それに沿って話す内容も変わり、いわば授業自体が進化していきます。当協会の訓練の変化(詳細は第3章第5節146ページ参照)は、訓練現場

と教育現場が共存していたからこそ生まれたものです。

毎年、自由研究の発表

盲導犬訓練士の「なぜ？」が自由研究という科目のテーマです。テーマは自由ですが、視点は「視覚障害者に役に立つこと」である必要があります。

5月になると、テーマの相談が始まります。論文などを書いたことがない高校卒の学生には、論文の書き方の講義や論文作成指導も行われます。2月には論文発表会を開催。会場には盲導犬ユーザーも参加します。そして、学生の論文は、論文集として印刷されます。

盲導犬訓練士にとって大切なことは、「視覚障害者の役に立つ」を常に前向きにとらえ、「今必要な役に立つことを考える」課題の発見、そして課題の解決を論理的、実証的に行う姿勢を身につけることです。こうした姿勢が、2014年のIGDFセミナーでは、6人の職員が英語で40分の発表を行うなど、いろいろな学会への積極的な発表へとつながっています。また、訓練士学校が休校になった今も、2009年に始まったQCサークル活動へとその場を変えています。訓練士だけでなくすべての職員が「視覚障害者に役に立つ」という視点で仕事を見直し、訓練のあり方を考え、年1回の「自由研究・QC発表大会」を行っています。

自由研究のテーマを一部紹介します。

耳の汚れやすさと適切なケア／訓練犬の飲水量とその変動要因／着せやすく濡れにくい盲導犬レインコートの提案／ラブラドル・レトリバーの抜け毛について／盲導犬歩行における左手持ちと両手持ちの効率性

の比較／「犬がしたいからする」から「しなければならない」への意識変化／盲導犬歩行におけるハイブリッド車による危険場面の考察／片耳難聴者の快適な盲導犬歩行の提案／パピー時代から行う訓練の考察／社会化期子犬の学習を考える／点字ブロックを利用する盲導犬歩行の訓練について／通行人から見た盲導犬と白杖——など。

他にも、「抜け毛1g≒32,683本を計った研究」「困っている盲導犬ユーザーの方を見ている通行人は多いのに対し早く声がかかったのは白杖歩行者であったという研究」から、飼育方法、訓練方法、歩行方法と、学生が行った研究テーマは多種多様。現在までに約150本の研究発表が行われました。

時を経て、こうした研究テーマが、当協会の挑戦テーマになっていることがわかります。

訓練士に求められる態度

多和田教務長は学生に対し、次のように話しています。

「訓練士学校では、自ら考えて行動できることが求められます。担当職員の指示を理解し、各自担当する訓練犬をいかにコントロールするか、日々試行錯誤の連続になります。そのためには広い視野を持って物ごとを考えられること、人に対しても犬に対しても相手の気持ちをくみ取り、理解して行動することが重要になります。一言でいえば、コミュニケーション能力です。犬の訓練士になることだけが目的ではありません。目の見えない人、見えにくい人が快適な生活・歩行を実現するためにはどのようなコーディネートをしていくのか。常に考えて行動できる訓練士を目指してください」

訓練士学校の学生が作った教科書から読み取れる、

訓練士に求められる態度は次のとおりです。

①観察→分析→計画→実行→検証

犬にあった訓練をするため。効率よく、計画的な訓練を行うためには意識して観察から検証を行うことが必要です。QCでいうPDCAサイクル（Plan-Do-Check-Act cycle＝業務を円滑に改善していく手法）です。シャーロック・ホームズがワトソンに言った「君はただ目で見ただけで、観察ということをしな。見ると観察するとは大違いだ」と同様に、犬を観察することが出発点です。そして訓練サイクルを回すことができるかです。

②一貫性のある態度

犬は上書き学習をします。犬に教えたいことを学習させるためにも、教えたくないことを学習させないためにも、一貫した対応・態度をとります。

③できるだけ少ない肉体的関与

力によるコントロールはしません。犬の犠牲の上に盲導犬訓練は存在しません。調教や服従訓練では、教えたことだけをする犬になります。ノーチョークで盲導犬を作り上げる技術が求められます。

④周りの意見を受け入れる柔軟性

常に客観的な物ごとの判断が求められます。偏った判断をしないためにも、犬にあった訓練を創造するためにも、周りの意見を受け入れる柔軟性が重要です。

⑤ユーザー目線で考える

訓練士は盲導犬を作ることはできますが、盲導犬を使うことはありません。犬の将来、ユーザーとの生活を想像する力（Imagination）を持つことが大切です。作る人（目が見えている人）と使う人（目が見えない、見えにくい人）の大きな違いを意識化して行うのが盲導犬の訓練です。

⑥一般常識と幅広い知識を身につける



自由研究発表の場は、程よい緊張感と自信の笑顔が広がります

盲導犬訓練士は視覚障害者に寄り添います。訓練のいろいろな場面で、人と犬を評価して判断を下す仕事です。犬のみならず視覚障害者に単に好かれるのではなく尊敬されるためには、人間力をつけることです。「知識→見識→胆識」は、人間学の学習三段階といわれますが、幅広い知識の習得はその第一歩です。



1期生から9期生までの 11年間の成果

2004年(平成16年)に盲導犬訓練士学校を開校し、1期生から9期生まで、計75人の学生が入学しました。年齢も高校卒業したばかりの18歳から32歳までの新入生でした。入学試験に挑戦した人は延べ1,599人、倍率は20倍を超えました。

11年間で専修科を卒業した人は51人で、入学者の約70%です。その中で当協会職員として採用された人は、基礎科を卒業して就職した5人を含め51人です。

そして2017年8月1日現在、40人が在職しています。訓練、繁殖、パピーの現場で業務を担うほぼ全員が、訓練士学校の卒業生です。また、ケネル、ユーザーサポート、普及推進の部門でも、卒業生がその中核を支えるまでに成長しています。

訓練士学校なくして、今日の盲導犬50頭育成体制の構築はありませんでしたし、「徳のある協会づくり」という企業風土は生まれてこなかった、といっても過言ではありません。

しかし、2013年3月、盲導犬訓練士学校の新規学生募集の休止を決断します。当時の職員数は110人を超え、これ以上、毎年5人近い卒業生を職員として採用し続けることはできない、との経営的判断からです。学校開校当初、他の盲導犬訓練施設でも卒業生を採用

してもらえるのではとの思惑がありましたが、訓練方法の違いの壁は高く、他協会への就職が思うように進まなかったことが遠因でもあります。

ゼミナール方式で訓練士を養成

そうした中、大きな問題が浮上します。女性盲導犬訓練士の結婚による退職と、出産による産休・育休です。肉体的にも精神的にもハードな盲導犬歩行指導員の仕事との両立は厳しく、長期の休職にならざるを得ません。

そこで考えたのが、これまでの大学方式から大学院方式への訓練士養成スタイルの変更です。学生の採用を3年間休み、2016年5月からスタートしました。

受験資格は大学卒業で、知識の習得は全国盲導犬施設連合会のDVDで独学してもらい、一人の研修生に一人のチューター(教師・教授等の補佐をする人)をつけて個人指導を行います。月曜日から金曜日までは、訓練センターを寮にして泊まり込み、朝と夜のケネル業務をアルバイトとして勤務してもらいます。こうした訓練漬けの毎日を通することで、1年間で准訓練士まで育てるといえるものです。そして3か月ごとに進捗テストを実施します。採用人数は数人です。人数ありきの採用はしません。授業料・寮費は実質無料で、一定の生活をするだけの収入はアルバイトで得られます。

2016年度、3人を盲導犬訓練研修生として採用し、2人が准盲導犬訓練士になりました。期待以上の成長ぶりでした。盲導犬訓練士学校11年間で作った訓練士育成の風土が、今も脈々と受け継がれていることを感じます。

2017年度も3人の盲導犬訓練研修生を採用しました。

盲導犬訓練士学校の学生数推移

	受験者数	入学者数	専修科卒業生数	職員採用者数
1期生	195	10	8	8
2期生	295	10	5	4
3期生	219	10	8	6
4期生	196	8	5	7
5期生	187	6	5	5
6期生	156	8	5	5
7期生	116	8	5	6
8期生	137	8	5	5
9期生	98	7	5	5